

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その8－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 傷志・高田 昌実・上村 章
田島 紘己
鹿児島大学 名誉教授 納 光弘
加治木温泉病院 夏越 祥次
鹿児島市 粟 隆志

[はじめに]

ドイツ、チューリンゲン地方の古都市アイゼナハの背後の山上にあるヴァルトブルグ城は、ワーグナーのオペラ「タンホイザー」の舞台になった城である。

この都市アイゼナハには、歴史上の3人の

偉人の足跡がある事でも知られる（図66）。即ち、聖エリザベト、マルチン・ルター、それにJ.S.バッハである。

図66の左、聖エリザベト（1207-1231）は、ハンガリーの王女として生まれ、4歳の時に

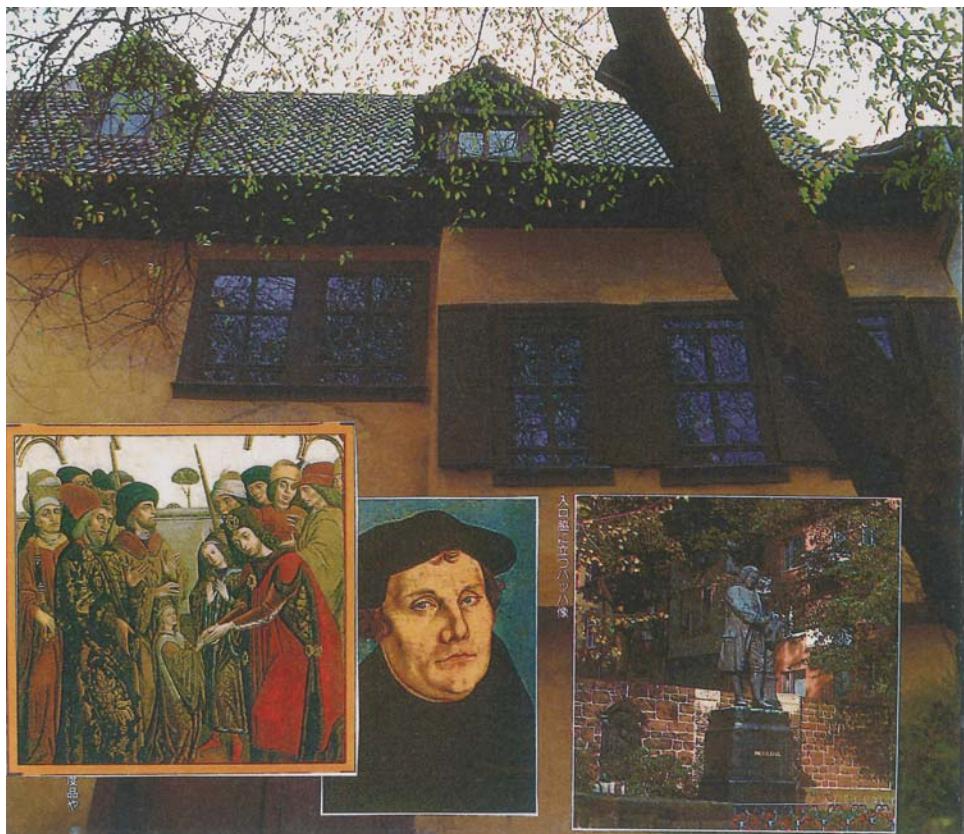


図66 アイゼナハの3偉人：聖エリザベト、マルチン・ルターとJ.S.バッハ
(左：LP, Hungaroton, SLPX1150/52)
(中：Wikimedia)
(右と背景：樋口隆一, バッハ, 新潮文庫, S60)

ヴァルトブルグ城に入城。

1227年、夫となった城主ルードヴィヒが、十字軍に従軍中に疫病で死亡。

以後、エリザベトは困苦の中、貧しい人や病人の為に生涯を過ごし、過労と衰弱のうちに、わずか24歳で死亡。奇跡の人となった。

図の中央下に描かれた小さい子が、城に到着し、歓迎を受けるエリザベトである。

図66の中央は、宗教改革者マルチン・ルター(1483-1546)である。

彼は15-17歳を、アイゼナハの聖ゲオルゲ教会の修道院校で、ラテン語などを学んだ後、エアフルト大学で哲学他を修めた。

ルターは、1517-18年に免罪符に反対の文書を書き、議論を展開したが、1520年、ローマ法皇により破門された。

更に、同年のヴォルムス帝国議会で、勅命により異端者となった。

追われる身となったルターは、彼の思想に賛同するザクセン選帝侯フリードリヒ3世に、このヴァルトブルグ城に匿われたが、その1年間で、エラスムスのギリシャ語の新訳聖書の独語訳を完成させるという、歴史的偉業を成し遂げた。

これにより多くの人が聖書を読めるようになったのである。その後、ローマを支持するカトリック派と、ルターを支持するプロテスタント派(ローマに抗議する人)との対立が起る。

両者の対立が一応終息したのは、1555年のアウグスブルグの宗教和議であった。

教会では、音楽は極めて重要な役割を受け持つ。ルターは、大学で音楽理論も学び、独語の約30のプロテスタント・コラールを作曲した。

この伝統は後世に引き継がれ、バッハにより頂点に達する事になる。

図の右は、アイゼナハのバッハ・ハウスを背景に、その前にあるバッハの立像である。



図67 ライプチヒの聖トマス教会
独プロテスタント音楽の中心教会。
バッハは、1723-50年をこの教会で過ごした。
(樋口隆一、バッハ、新潮文庫、S60)

ヨハン・セバスチャン・バッハ(1685-1750)は、アイゼナハに生まれ、7歳の時にルターと同じ学校に入学し、ルターの後輩となった。

9歳で母、10歳で父を亡くしたヨハンは、その年に、パッフェルベルの高弟であった長兄、ヨハン・クリストフに引き取られ、アイゼナハを後にした。

以上の事からも分かるように、バッハの音楽は、独プロテスタント音楽である。

その後、バッハは各地を転々とし、ヴァイマル(1708-1717)、ケーテン(1717-1723)を経て、ライプチヒの聖トマス教会(1723-1750)で、一生を終えた(図67)。

[4] ジョルジュ・サンド

(5) ジョルジュと破局後のショパン、晩年、
(付録) バッハとショパン、メンデルスゾーン、リスト、そしてカザルス、つづき
・フェリクス・メンデルスゾーン(1809-47)は、裕福で音楽に満ちた家庭に、初期ロマン派の音楽家の中でも、最高の天分を持ち誕生した。その才能は、音楽の他、語学、絵画等、多岐に亘っている。

その開花は（モーツアルトも含め）他の全ての音楽家を凌いでいたと言われる（もちろん、その才能と作品が、聴衆や時代の趣味、好みに合うか否かは、全く別問題である）。

10歳からツェルター（後述）に作曲などを習い始めたフェリクスは、10代で交響曲、6曲のオペラ、13の弦楽の為の交響曲、6つの協奏曲、6曲のPソナタ他、数10のピアノ曲、室内楽曲などを作曲した。

わずか16歳（1825）でヴァイオリンの師エドゥアルド・リーツの誕生日を祝って書かれた「オクテット、弦楽八重奏曲、作品20」は、8声のフーガを含み、彼の早熟な作曲能力を遺憾無く發揮した、個性豊かな傑作で、当時、既に大作曲家である事を如実に示している。

シェイクスピアの戯曲を元にした、完成度が高く、創意に富む「夏の夜の夢、序曲」を完成させたのは、17歳の事である。

フェリクスは、他の音楽家とは比較にならぬほどの記憶力を持っていたと言われる。

例えば、子供時代に、主旋律であろうが、ベートーヴェンの全交響曲を暗記し、ピアノ

で再現できたと言われる。

4歳年長のファニーもピアノ演奏に優れ、14歳で「平均律」の全曲を暗譜しており、フェリクス自身も14歳で暗譜演奏できたと言われる。これは、今日のピアニストでも、非常に困難である（図68）。

またメンデルスゾーンの家系は、バッハ音楽と関係が極めて深い。

大伯母のサラ・レヴィは、J.S.バッハ（以後、単に「バッハ」と略す）の長男のW.F.バッハの教えを受けた事もあり、バッハや、その二男のC.P.E.バッハ（生前は父より名声があり、ハイドン、ベートーヴェンに強い影響を与えた）の楽譜のコレクターでもあった。

さて、フェリクスは14歳のクリスマス・プレゼントに、サラ・レヴィにバッハの「マタイ受難曲」（以後「マタイ」と略す）の自筆譜の写本をもらった。自筆譜は、フェリクスの音楽の師、ベルリンのジングアカデミー会長ツェルターのコレクションであったとも言われる。

18歳のフェリクスは、1827年の冬より、当時ほとんど忘れ去られていた「マタイ」に興味を抱き、少人数の合唱団で練習を開始した。間もなく彼は、教会音楽のコーラス（特にイエスの声部）などの持つ、圧倒的な偉大さに気付き、更にその内容を精通するに従い、「マタイ」の公開演奏を望むようになった。

この長大な曲（演奏時間約3時間）を、聴衆が理解できるか不安であったが、デフリントらの強い後押しで、ベルリンのジングアカデミーでの演奏会を目指すようになった。

アカデミー会長ツェルターの許可を得たフェリクスの努力で、演奏に参加する希望者は、急激に増え続けた。

目指す演奏会で重要な事は、楽譜に忠実な完璧な形での演奏ではなく、ともかく演奏会の成功、つまり、本曲の特性を印象的に表現



図68 フェリクスと姉のファニー

ファニーは、ピアニストでドイツの女性作曲家のパイオニア。

(CD, Sony, SRCR9108, 1991)

し、聴衆の感動を引き起こす事にあった。その目的の為、曲の1/3を敢えてカットした。本番を盛りあげる為、青の上着、黒いズボンとネッカチーフ、黄色の手袋とお揃いのユニフォームを作り、更にこの曲が、ライブチヒで最初に演奏されてから、丁度百年後に公開演奏する事の重要性を、世間に宣伝した。

当時は、ライブチヒでの「マタイ」の初演は、1729年4月15日と考えられていたからである。然し今日では、1727年の聖金曜日（4月11日）と考えられている。

フェリクス20歳の1829年3月11日の初演では、彼はフィルハーモニア協会のアマチュア音楽愛好家の4百人近い合唱団と、これまた大部分がフィルハーモニア協会のアマチュア愛好家から成り、一部のみ宮廷楽団員から成る楽団を指揮し、超満員の大観衆を前に、大成功をおさめた。

演奏者全員とベルリンの聴衆の誰もが、この公演をエポックメイキングと認識していた事は、当時のドイツの一般市民の音楽水準、音楽的教養の高さを示している。

わずか20歳の青年が、一方で多数の曲を作曲しながら、この未知の大曲の重要性を認識し、演奏会の成功のために、曲の多くの部分をカットし、一部を編曲し、楽器編成を練り



図69 メンデルスゾーン建立のバッハ記念碑
1843年4月23日除幕。
(樋口隆一, バッハ, 新潮文庫, S60)

直し、膨大な数のアマチュアを動員し、練習場を確保し、ゼロから訓練し、世間に宣伝し、この偉大な曲の演奏会を大成功に導いたが、そのフェリクスの想像を超えた努力と、マルチな才能には、正に脱帽である。

1回目の成功に伴い、第2回目が10日後の3月21日、評判を聞きつけた国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世の臨席のもと、ハイネ、ヘーゲルなども出席し、超満員の会場で行なわれた。

2回目の公演収入は、貧困家庭の娘達の裁縫学校設立の為に寄付された（慈善公演）。

この演奏会に触発され、以後バッハの宗教曲、器楽曲などに、多大の関心が向けられるようになり、バッハの再評価、ある意味、バッハの復活となつたのである。

フェリクスは生涯、バッハと離れる事はなかった（図69）。

フェリクスは、多数のピアノ曲も書いた。図70は、6CDから成る、M.ジョーンズ演奏のP曲全集の1枚である。

絵葉書風の風景画は、各地を旅行した彼のスケッチである。その描写力は、彼の画才の



図70 メンデルスゾーンのピアノ曲全集
このCDは「6つの前奏曲とフーガ」などを収録。風景画はメンデルスゾーン画。
(CD, Nimbus, NI5071, 1972, 73, 79)

一端を示している（図70）。

このCDには、「6つの前奏曲とフーガ、作品35, 1832-37」と「前奏曲とフーガホ短調」他、練習曲等が収録されている。

「平均律」を暗譜していたと言われるフェリクスは、「前奏曲とフーガ」では「平均律」の形式に忠実に作曲している。

一方、既述のように「平均律」にインスピレーションを得て作曲されたと言われてきた、ショパンの「前奏曲集、1839」は、フーガを欠いている。この点が極めて重要である。

もしショパンが「平均律」を研究して、「前奏曲集」を作曲したとすれば、バッハに全く敬意を払っていない事となる。

フーガこそが、バッハをバッハたらしめている、バッハに必須の作曲形式であるからである。

そうではなく、バッハの対局にあるショパンが、バッハをも受け入れなかつた事こそ、ショパンの本性であると、私は考えている。

もし「前奏曲集」が、他の作曲家の影響を受けたとすれば、それは当時、ベートーヴェンと並び称されていたフンメルである。

フンメルは「全ての調による24の前奏曲集、作品67, 1815」をショパンの24年も前に書いているし、ショパン自身「モーツアルト、ベートーヴェン、フンメルは、我々音楽家の全ての師である」と述べ、彼を熟知していた上、調性の配列も、ショパンの前奏曲集と同じである。更にフンメルの「24の練習曲」を聴けば、その数曲は、ショパンの作品25に類似している事にも気付く。

同様の曲集はショパンに限らず、モシュレス、ヘンゼルト、ヘルツらも作曲している。

さて、「6つの前奏曲とフーガ」は「平均律」に則り書かれているが、フェリクスは、バッハを自家薬籠の物とし、独自の作品に昇華している。

第1曲目のみ説明する。この技巧的な曲の

前奏曲は、32分音譜の華やかなアルペジオの伴奏音型に伴われ、中声部の印象的な主題旋律が、マルカートで歌われる。フーガ主題は叙情的、優美で、やがて自身のコラール主題があらわれ、静かな終末部を迎える。

大器晩成、日本人好みのフランクは、若い頃にこの曲を聴き、感銘を受け、脳裡に刻み込んだに違いない。彼の最も重要なピアノ曲「前奏曲、コラールとフーガ、1884」を聴けば、その事が分かる（私見）。

フェリクスは、20歳から10回英国を訪れ、「フィンガロの洞窟、序曲、1830」「交響曲第3番、スコットランド、1829-(42)」を書いた。

彼の上品で端正な音楽は、英王室（ヴィクトリア女王など）を始め、英国で大人気だった（既述のように、ショパンはロンドンでは、人気のメンデルスゾーンなど、他人の曲を演奏させられるのが嫌だった）。

43年、34歳の時に、ドイツ初の音楽教育機関、ライプチヒ音楽院を設立。

彼自身と彼のピアノの師モシュレス、シューマン、ヴァイオリンのダビッド、ヨーゼフ・ヨアヒムらが学生を指導した。

フェリクスのV協奏曲は、友人ダビッドのために、彼のアドヴァイスを受け作曲された。

フェリクスはユダヤ人であったため、ワーグナーに非難され、不當に扱われた。

（付録）メンデルスゾーンのV協奏曲

19世紀ドイツのV協奏曲の代表作としては、ベートーヴェン(06)、メンデルスゾーン(44)、ブルッフ(66, 68改訂)、ブラームス(78)が挙げられる。

ヴァイオリンは小さい楽器なので、幼少時より、才能を發揮したり、大演奏家に見出される事が多いと思われる。メンデルスゾーンのV協奏曲は、その際、そして今でも重要なレパートリーの1つである。



図71 ユーディ・メニューイン75歳の誕生祝い

アビーロードでの13歳の録音の復刻盤。メニューイン学校への1枚6ポンド寄付目的の限定盤。
(LP, Biddulph, SYMP1094, 1929)

• ユーディ・メニューイン (1916-99)

7歳の時、サンフランシスコでメンデルスゾーンのV協奏曲でデビューし、大センセーションを巻き起こした。13歳でベルリン・フィルと共に演し、一夜でバッハ、ベートーヴェン、ブラームスのV協奏曲を演奏。

ポーランドのバルトークが、第2次大戦で米国に逃れて来た時に援助。彼の「無伴奏Vソナタ」をカーネギー・ホールで初演。

また、第2次大戦後、戦犯容疑のフルトヴェングラーが無罪になった1ヶ月後に、ルツェルン音楽祭で共演の手を差しのべた。

図71は、75歳の誕生祝いに際し、13歳時に、アビーロードのEMIスタジオで録音されたマスターより復刻された、モーツアルトのVソナタ第2楽章のLPである。

サインとシリアル・ナンバー付きで、300部の限定盤であるが、レコード代6ポンドとメニューイン学校への寄付6ポンドであった。希少で慈善目的でありながら、高額にしない所に、彼の音楽家としての良心が感じられる。私の手元には、3枚が届けられた。

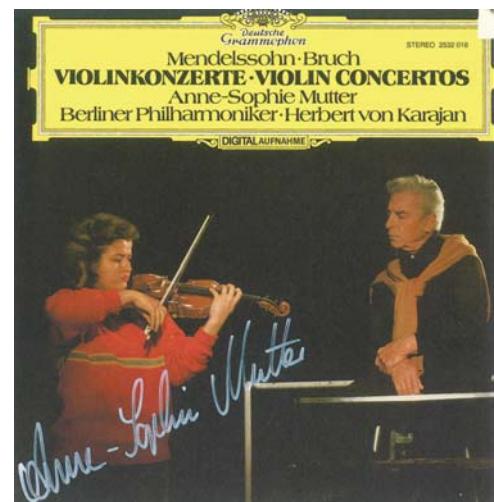


図72 アンネ・ゾフィー・ムターとカラヤン
アンネは13歳でカラヤンに認められた。アンネの演奏に眼を閉じて聴き入るカラヤン。カラヤンのいつものポーズ。
(LP, D, G., 2532016, P 1981)

• アンネ・ゾフィー・ムター (1963-)

アンネは13歳の時に、ルツェルン音楽祭でカラヤンに認められ、14歳よりザルツブルグ音楽祭、ベルリン・フィルの定演にも出演を開始。14歳でカラヤンも初レコーディングとなる、モーツアルトのV協奏曲でレコード・デビューした。

図72は、18歳のカラヤン・ベルリンフィルとのメンデルスゾーンとブルッフのV協奏曲である。前者は、メンデルスゾーンがダビッド、後者は、ブルッフがヨーゼフ・ヨアヒム



図73 ピンカス・ズーカーマン

ピンカスは13歳で、アイザック・スターとカザルスに認められた。メンデルスゾーンのV協奏曲と16歳で作曲したオクテット。

(LP, PHILIPS, 412212-1, 1983)

のアドバイスを受け作曲した。

・ピンカス・ズーカーマン (1948-)

13歳の時の音楽院での演奏を、アイザック・スターとカザルスに認められた。

カザルス音楽祭やバーンスタインとの、メンデルスゾーンのV協奏曲で好評を博した。

図73は、メンデルスゾーンのV協奏曲と、前述、16歳で作曲したオクテット（弦楽八重奏曲）。

・アイザック・スター (1920-2001)

1960年、カーネギー・ホールが老朽化で閉館に落込みそうになった時、彼の尽力で、ニューヨーク市が買い取り、新装・再開となった。アイザックはメンデルスゾーンのV協奏曲を4回録音した。

図74は、ここでは、モーツアルトのV協奏曲第1、5番。1980年60歳のサイン。

(つづく)

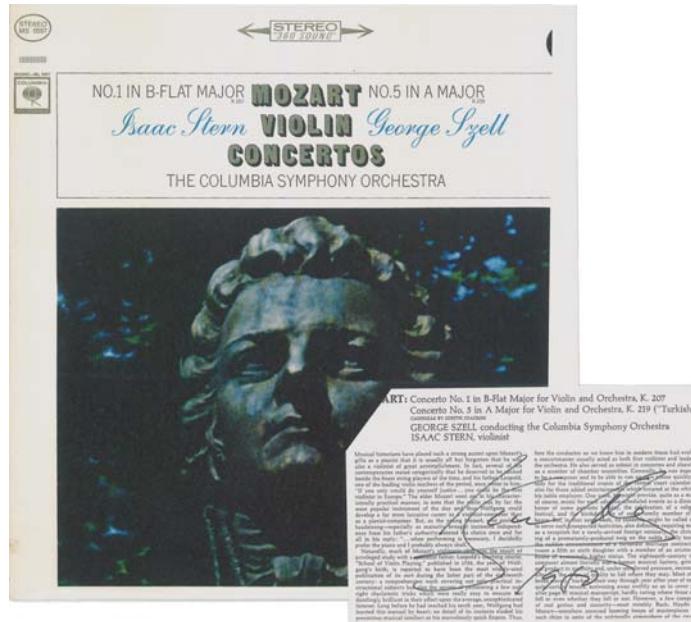


図74 アイザック・スター

アイザックは1960年、老朽化によるカーネギー・ホールの閉館の危機を救った。

(LP, COLUMBIA, MS6557)